

資料
紹介

恩師ジェームズ・
バサード博士の紹介 (二)

篠崎 茂 穂

今回は恩師の主著「社会変動と社会諸問題」と「児童成育の社会学」の二冊を紹介したい。

「社会福祉の諸問題」を改訂増補し、一九三八年に出版されたものが「社会変動と社会諸問題」である。前回に述べた如く、此の書は恩師の四十幾年に渡る研究の中核をなすものと云へよう。初版の序言によれば「此の書の目的は学徒及び一般読者に社会の諸問題を紹介する事で、其の問題は社会変動を背景として考慮されている。」従つて問題の取扱は最終的結果からでなく、寧ろ發生の諸要因からなされている。

(一)「社会変動と社会諸問題」

此の書は八部三十三章八百七頁のもので第二部迄に概念を取り扱い、以下に於て實際の諸問題を取り上げ、第一章に於て社会問題の意味を規定するに当りオーネル・ハ

ートやハロルド・フェルプス等の定義を紹介した後現実的な立場からの定義を下し、社会問題は常に集団の判断に待つ可きものであるが故に相対的なものである事に言及している。

第一部は三章から成立しているが先ず社会問題の研究に於て変動の概念を取り上げている。

第二章は目標と方法に就いてであつて福祉活動は社会に関心を有する人々が保護監督的立場から諸問題を宿命的に見る消極的対策と、積極的に凡ての問題には何等かの対策がある筈だと云う二つの立場からなされて来た事から筆を起して著者は何れの場合を問わず問題の原因に関して科学的研明の必要を強調している。更に科学的研明の方法それ自体も色々に変遷して来ていることを指摘して曰く古い理論ではマルサス、

マルクス、チョウチ、スペンサー等の如く解釈的方法を用い、凡ての問題を一面的に解釈せんとしてゐる欠点を有した。次の科学的研究の方法は帰納的方法を取りケース集積と図表式の二つの方法を以つてする様になつたが近代は更に進んだ科学的な解決策を講ずるに至つてゐる。即ち社会の現実から法則と理論とを発見し、総合的で又客観的な解決方法を取るようになったと云う。著者は近代社会は技術文明の社会であり、其の技術の発達と人間の生活様式の変動は非常なもので全く知識の力による革命であると云いつつも社会の事情はそう単純ではない事を肯定し社会福祉の問題は人間の問題で、其の解明にはあらゆる科学を総動員せねばならぬ事を忘れてはならぬと云う。

此処に於て著者は諸科学の中にも応用社会学こそは其の中核をなすべきである、何故なら「社会学と云うものは或る希望された社会的目的の達成のために発達してきたものである」からであると論ずる。(三十二頁)そして凡ての科学は其の実用性が明かになつて来る時新たな発展段階に入ると

云う。

以上の様に著者は社会問題の取扱方と諸科学、特に社会学との関係を述べた後第四章に社会問題の特異性に就て言及する。其の特異性と云うのは地理、文化、生態学、農業、経済、商業、米国の歴史、社会学上の集団、自然及び階段的区域 (Gradient) 等の地域性、次で時代的特異性、更に色々な環境や要因及其の相互関係の特異性が考慮されねばならぬ事を指摘している。

第二部は社会変動の背景について述べ。

近代人は凡ての事を生成の状態に於て把握せんとする。社会問題も変動と云う事が建前として考究されねばならぬ。では社会変動とは何か。第五章は此の問題を取り扱う。

社会変動の社会学的概念は文化的なものであると指摘する。従つて「変動の鍵は発明に見出さる可きもので、其の発明と云うのは文化への何らかの新しい要素の導入や諸要素の新たな結合を意味するものである。」(六十二頁) 故に社会変動の速度と発明の早さとは相関関係がある。結局文化ツレイトを発明の速度と云う点から検討すれ

ばよいと云う事になるが著者は産業上の変動を見るため、新しい産業、動力、製産等を取り上げ、次で交通運輸の変動、更に通信の変動を検討して社会変動の本質を突証するに足るものとしている。

第六章に於て著者は個人と其の移動性の中に変動の重要性を見んとして先ず初期の社会に於ては個人は血族集団の中に全く吸収されていて個人の資格と云うものは集団の福祉のためにのみ認められていた。奴隷制度の下に於ても亦然りて、彼らは個人としては生活扶養の責任を持つておらず、ただ一階級として最小限度の保証がなされていた。封建性やギルド組織の社会に於ても大体同様で個人性と云うものは認められていなかった。が近世になつて社会学の立場から個人の創意、責任、個人の価値、又個性が認められる事となり個人の発見を見るに至つた。此の変動と共に重大な意味を持つものは個人の移動である。即ち近代人は住居、職業自分及び接触関係を自由に移動して行く。此の人口の移動は歴史的に色々な形態を取り又其の範囲も雑多である。例えば国から国へと移民の形を取つたり、農村

より都市へと、或は又下層階級から上層へと云つた性質のものもある、此の様な社会的変動及び人口の循環は社会問題を引き起す原因となる。第七章は此の点に關するものである。著者は便宜上次の六つの点に觸れている。(一)社会変動と人間社会に新しい要求の創造、(二)変動する文化の相関関係、(三)大規模人口移動の意義、(四)社会的移動と解体、(五)社会的移動と人格的分裂、(六)社会統制の変動面。

第三部は社会福祉と収入の問題で第二部の論述を基盤に社会福祉の経済面を此の部に取り扱うのである。第八章は収入と人間の肉体的、知的、更に生活芸術と云う立場からと生活一般の総合的見地と如何なる關係に在るかを研究するものである。

第九章に於て著者としては極めて重大な今日尚未決定なものである人間の経済的福祉の客観的測定法の問題に論及している。其の測定法の単位を生活の程度、標準及び規準の三つとし、此の章に於ては現実の目的よりも寧ろ、主として程度の立場から測定法の問題を論議している。更に次の十、十一章に於て生活費、給料及び収入に關す

る現状の説明併びに家計を中心に経済的福祉の測定を試みている。

第四部は社会的並に経済的保証の問題で、著者は此の部に於て失業者と老人が如何に自分のみならず扶養家族をも不安に陥れているかを指摘し、其の主な理由は収入や貯蓄金が不充分であつたからだと言ふ点を論述している。特に前者の場合複雑な要素を含み近代工業文明の最も悲劇的な問題であるにも関らず、学問の対象としては何れの分野に帰属するかを決定する事にすら困難を感ずると云う。著者は十二、十三章の両章に於て失業の本質、範圍、種類、社会的損失、要因及び対策等を取扱い、十四章に老人問題を討究し米国の如き若い国は次の世代には老人人口が倍になり従つて遅滞の問題も深刻になる事を予想している。

第五部は五章百二十五頁に渡り肉体の病が如何に社会全般と深い関係があるかを指摘し健康は本質的には一つの社会問題だと結論している。従つて社会的対策として救済的と防止的の両面のプログラムを立てる事を教示する。次で傷害が健康上の福祉に

如何なる重大な関係を有するかに論及し米國が技術の発見改良により世界一の傷害國である事から其の対策に遅滞を生じてはならぬ事に注意を喚起する。

第六部は精神病の問題を内容とする。

近世に於て社会の情況は其の複雑性も又範圍に於ても非常に變動を來した故にこの様な變化に適應させて行かねばならぬ精神機能が問題を避け難くなるのも当然の事とする。更に社会学者として著者は心理学の立場からより社会的経済的立場から精神弱者を規定づけんとして精神的欠陥者に関する英國の委員会が「精神的欠陥の唯一の真に満足すべき規準は社会的のものである。若し人が独立して社会的に適應し得ず従つて他者の注意、監督や支配を必要とするならば、其の人は精神薄弱者である」と云う規定を受け入れている。(四八一—二頁)著者は精神病の病因が今日は知られ、従つて二十四章に精神衛生の立場から注意、治療、予防及び精神の助長が可能な事を説く。特に此の分野に於て精神病等の重要性を強調して「今日人間の問題は精神病学の問題である」と云うのは常識となつて

いる。」と書いている。(五八九頁)

第七部家庭と児童福祉の問題は三章からなり變動して行く家庭の背景、家庭解体の諸問題及び子供の問題に就て討究している。

第八部社会事業の諸問題に於てパーサーは「社会事業の問題は社会及其の諸問題の理解に當つては或る重要な發展を内包しているものとして考慮されねばならぬ」と云う。(六七—頁)其処で二十八章に於ては十九世紀末以後今日に至る發展段階を理解するためにそれ以前の歴史の中に理解の便宜上次の様な諸点を討究の対象に選んでいる。(一)人間の欲求に対する初期の反応、(二)教会の役割、(三)英米に於ける国家社会事業の發達、(四)個人的慈善事業、(五)初期社会事業の性質、動機及び失處。

第二十九章には一九〇〇年から一九三〇年に至る間の私的社會事業に就て書き此の間の著しい變動を指摘し次章に対する背景として三〇、三十一の兩章には公共の社会事業である養育院、院外救助、其の他の公共福祉事業と其の私設事業との關係等に於ける一九三〇年以後の變動を本質的

に究明することに務め、最後に将来への展望に一瞥を与えている。最後の章はこれ迄に指摘されて来た社会問題と云うものは社会的変動と云う事を背景として考慮され、従つて効果的な計画も同様な立場からなされる可き事を前提として計画の作り方を論じ、此の章並に本書の結論として社会的計画の内容と要求の主要なものに社会意識、社会的価値、社会的手続、及び社会的統制の四つを挙げてゐる。

(四)「児童成育の社会学」

此の書は一九四七年ハーバーから出版され、七部二十九章の大冊の書であるが各章の終りに概略があるので利用に便宜がある。表題の示す如く、此の書は問題の取扱を社会学の見地からなす事に一貫し、児童の發育を社会的境遇の中に討究する事に重点が置かれてゐる。

第一部序論の二つの章の中で児童が実験室の中でなく自然の環境や生活状況の下に如何ようにも変化し得る者で然かも發育の過程に於て研究されるに至つた事を指摘する。従つて「子供の行為に對する社会学的處理法 (Sociological Approach to

Child Behavior)」と題する第二章は此の書の中核をなすと云えるので少し詳細に紹介してみたい。

著者は歴史的に行動心理学は児童の行動を心理測定法や人格検査の方法で研究する様になり、又精神病学や精神分析学も研究方法として用いられる様になつたが而し其の後環境決定論が盛となりやがて「境遇的處理法」が研究方法となるに至つた事を指摘する。此処に問題になるのは環境 (environment) と境遇 (situation) の区別で、環境が人間の行為の決定要因であるとは昔から考えられて来たのであるがパブロフ学派や精神病学派の進出と共に環境の意味内容が同一視せられなくなつて来た。同時にクウリー以来タマスやズナエキ等が人間の行為が個人並に社会關係に於て決定されると主張するに至り、パークやパーチス等の考えと共に人格は社会的条件によつて作られるものだとこの社会的決定が成立するに至つた。パーサードも此の立場に在る者として境遇と云う意味を特に重視し、其の内容を此の章に説明する。著者は境遇を構造と過程と内容の三点から明白に

せんとし、構造に於ては其の構成要素、特質、持場及び其の相互關係を静的な状態に於て分解し説明する。次に過程に於ては境遇の諸要素の相互作用を取り上げる。第三の内容は或る特定の点を中心に組織された文化の交互的断面と選択の兩者を含むものであるとする。従つて著者は此の「境遇的處理法」は特に社会学の立場から意味を有する事を強調し、今日迄は社会的境遇は二次的、或は附屬的に考慮され、科学的研究の独立の分野として認められていなかつたが今や人間が境遇に反応する点とは全く別に境遇それ自身が帰納的に研究されねばならぬ事を指摘する。と云うのは過去に於て既に境遇の重要性は生理学者や心理学者等によつて認められて来ていたにも関わらずそれは主として児童發育に及ぼす影響を強調し境遇其の物に對する研究は其の場的のもとのとされていたからである。だがパーサードは此の書に於て境遇は実験のために自由勝手に作り出される様はそんな簡単なものではなく、時には可成りの速度で常に変動して行くものであるが故に科学的に特別に研究されて後始めてそれが児童の行動の発

育に及ぼす影響を知り得るものであると云う。此の章の要約の第三に「行為の諸問題に対する一つの決定的な問題の処理法は行為の反応を呼び起す境遇に関する研究によるものである。」と述べている。

第二部は児童と其の家庭の背景に就てであるが境遇と云う立場からの問題の取扱を中心に第三章家族の構成と児童、第四章家族の相互作用と児童、第五章兄弟姉妹間の相互関係、第六章家庭の文化と児童、第七章児童が両親に寄与する物の五章からなつてゐる。家族的境遇も中心を何処に置くかによつて異つて来るので常に其の中心が子供に置かる可き事を原則として問題の討究がなされてゐる。特に注意を引かれるのは第七章である。と云うのは此の章に指摘される様に家族と児童との関係の研究は大人中心となり勝である。子供があるが故に家庭の者の相互作用が複雑となり、従つて家庭生活が多方面に深く豊富にされて行く。尚又忘れ勝な生命の神秘や、生物の成育の楽しみをも知らしめられて真の人生の意味と人間としての責任を自覚させられる。

『様々な形で此の事を受け取れる能力を有する親達に持つて来て呉れる者は子供である』と著者は此の章を結んでゐる。

第三部には家庭生活の色々な面を取り上げ子供の発育の相關関係を示してゐる。即ち第八章食卓を中心とした雑談、第九章表現様式、第十章は例えば仏語と英語、日本語と朝鮮語等の如く二つの國語を話さねばならぬ家庭の子供、第十一章来訪者の役割、第十二章召使と子供の発育等の章から成り立つてゐる。此の部に於て著者は児童の社会化を更に具体的にメカニカルな立場から討究してゐる。従つて往往にして無視されて來てゐる点に読者の注意を促してゐる。

第四部は「児童と階級組織」と「児童と身分」の二章である。社会に於ける階級の差が如何に児童の成育に影響するかは民族的又は宗教的からも見られるが家庭に於ては身分の上昇を目指して児童を育成せんとするので児童は階級や身分の意味の重要性を意識せざるを得なくなる。従つて階級や身分の意味とか其の帰属、更には階級や身分の移動等に就て適当な教育の必要がある。

第五部は「問題の家庭」に就てであつて「問題になる態度の両親」、「衝突を起している境遇の家庭」と「圧迫の下にある家庭」の三章からなつてゐる。これ迄児童との關係に於て家庭の境遇が分析されて來た

のであるが此の部に於ては問題を醸す家庭の分析に入つてゐる。例えば三章に言及されてゐる様な子供を生み育てる事に問題を持つ両親の児童に対する態度が惹起する家族の境遇や其の他両親間の不和、更に不和な家庭境遇を醸し出す外的圧力等が如何なる影響を児童の発育に与えるかが討究されてゐる。従つて此の部は第四部迄とは異つた立場からアプローチされてゐる事から同時に次の第六部に対する準備ともなつてゐる点に重要さがあると思つて。

第六部は「家庭外への成長」、「親を拒否する児童」、「学校境遇と児童の発育」、「仲間集団の役割」、「児童発育のための社会的背景」、「戦争と児童の発育」等の章を含んでゐる。児童は家庭から学校や仲間等の諸集団へと生活境遇が拡大されて行くと同時に子供は両親に対する絶対依存の時代から段々独立へと成長して行くが此処に児童の個性の確立と共に人格の社会化への成育のある事を指摘する。

著者が此の部の最初の章で強調する点は家庭外の境遇の変動が如何に児童及其の家庭に影響を与えるかと云う事である。然かも此の時代に児童には色々な圧迫と緊張が及んで来る。其の結果不幸にも一般社会と

一致せぬ行動をする様ないわゆる非行の児童が出来てくる。此の様な場合は米国内に於て特に目立つが其の理由として著者は次の第十九章で外国の文化を持つ家庭、田舎に生長した両親を持つ都会の家庭及び家庭の人々が各々異つた文化変動を受けている家庭の三つに就て特に討究を続け、此の三種類の何れかの家庭環境にある子供が米国内に可成多数で且又其処に色々な問題が存在する事を指摘している。次に学校の情況、仲間集団の役割等各々重要な影響を与えるものであるが而し子供の行為類型や全人格の形成には直接深い影響を与える家庭と共に、以上の諸集団の凡てを含む社会全般を無視する事は不可能である事を二十二章に取り上げ特に社会生活の無形の色々な点が子供の發育に及ぼす重要性を強調している。斯くて最後に戦争が如何に影響するかに論及し「ただ時が子供に与えた総合的な結果を明白にするだろう」(五七八頁)と結んでいる。

第七部は変化して行く子供の身分に就てである。今迄主として個々の子供の立場から論述されて来たが此の最終の部に於ては人口全般内の子供、大人、老人と云う立場から子供の身分の諸問題に論及している。

従つて此の部が此の本の主要部と云う事が出来る。

先ず一社会の全人口の構成は年齢層による分割、其の間の斗争と云う点から社会学上重大なもので、子供の身分と云うものも此の分割された年齢層間の相互関係に於て決定される事を指摘する。歴史的には余り討究されていない子供の身分を西欧諸國の歴史に照して社会的意味を明示して、更に米國の歴史に照して其の変遷を示して曰く「子供に関する近代の歴史上顯著な変化が大人の頭の中に加つた。それは此の方面に於て大人、特に両親が子供を大切にする様になつて来た事の変動である。此の変動は人々の一社会的要素として子供の生活と身分に一つの革命をなすものである。」(六四三頁)

第二十七章は児童福祉運動の性質の範圍、運動のタイプ、歴史、関心と動機及び社会進歩等の立場から論述し、次章に児童の権利即義務に対する免除を取り上げている。これは一般的権利の概念を背景とし、私的のものから公的即法律上のものとなつて来た事を示す。此の中には幼児の死亡や産児制限等生命に関するもの及び子供が生活して育ち社会人となる間に必要な権利を包

含し、此の様な権利内容が出生率や出産力の観点から論じられている。

第二十九章は此の部の結論でバーサードは児童の發育に関する結論と評論とを与えんとして(一)児童の権利に関する社会的認識の違ひ、(二)経済的限界の問題、(三)児童發育に関する社会的関心の程度の設定等を討究している。

以上此の書の紹介を終るに当り忘れてならぬ事は参考文献に就てであると思う。と云うのは参考書を三百六十三、又論文三百二十七を挙げているが其の中に著者自身の書は四冊、論文は二十六の多きに及んでゐるからである。

恩師バーサード博士は児童、結婚、家庭等を中心研究テーマとして今日に至り、前号で紹介した如く、彼の研究は益々内容を深め学界に貢献する事多大である。米國医学界が社会学の知識の必要を認め、医学生に社会学を必修科目とせんとした矢先、母校ペンシベニヤ大学医学部の兼任教授となり、大学附属のカーター研究所所長として、研鑽を積まれている事は以つて学徒の範とすべきであろう。恩師の健斗を祈ると共に日本の学界も先生の偉業によつて裨益する所あらん事を希望して恩師紹介を終る。